
JOKERは冷たく笑う

江角 稚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JOKERは冷たく笑う

【Nコード】

N0945BA

【作者名】

江角 稚

【あらすじ】

平凡な日常に、ばらまかれた不穏のカード。

十三人のジョーカーが、冷たく笑う・・・。

(前書き)

音無 無音さんのお題小説「ジョーカー」に参加させて戴きました。

・・・そしたら、こんなことになりました。

好き勝手やらせて戴いて、音無さんには感謝してもしきれません!!
・・・ので、許して下さい。。。

平凡な日常に、ばらまかれた不穏のカード。

十三人のジョーカーが、冷たく笑う・・・。

一通の手紙が届けられた。
不気味な程、真っ白な封筒が、俺の家のポストへと放り込まれていたのである。

なかのゆえ
仲野由縁は、その”差出人不明”の封筒を不思議そうに眺めていた。

しばらく外見だけを観察していたが、中身を確認しないことには、何も解決しない。
俺は封を開けた。

”一月四日水曜日、午後六時に××高校体育館裏にて待つ”

「・・・何だこりゃ？」

俺はメッセージの書かれた厚みのある紙を、裏返す。

それは、俺の友人：鹿江桃の写真だった。

「桃・・・？」

そして、もう一つ。

封筒の中には、トランプが一枚。

スペードのエース。

ミスプリで、裏にジョーカーの印刷された、スペードのエースだった。

俺は指定されていた、自分の在籍する高校の体育館裏にいた。

午後六時となると、学校の門は、完全に閉ざされる。

俺は用務員に見つからないよう、こっそりと忍び込んでいた。

そこには、十一人の男女がすでに来ていた。

その中に桃もいた。

「桃……」

「由縁君!？」桃は振り返り、驚きの声を上げた。

「どうして、由縁君が此処に……」「いや、この手紙を出したの、お前じゃないの?」

俺は桃の言葉を遮り、封筒を見せた。

途端に、青ざめる桃。

「嘘、嘘よ．．．何で由縁君まで．．．そんな．．．」
桃は”信じられない”とでも言うかのように頭を振った。

桃は、何か知っているのだろうか。

その時。

「あれっ!？．．．由縁？」

呼ばれた声に振り返ると、そこには友人の山口誠也の姿が。

「お前、何の用だよ？」と誠也。

彼の台詞の真意を読み解けずにいると、桃はあっ、と声を上げた。

彼の手には、俺の写真とスペードの十三。

え．．．一体、どう言うことだ？

不意に、スピーカーが入った。

「皆様、ご足労戴き、誠にありがとうございます。それぞれ、」
「OKER」がミスプリントされたトランプをお持ちですね？」

その声に、何と無く皆が札を掲げる。

それぞれ、スペードの三から十二の札だった。

俺が一で、誠也が十三。

と言うことは・・・。

隣を見ると、桃は震える手の平で”スペードの二”を握り締めていた。

「初めまして。私は・・・強いて言うなら、そうですね。」元・
「OKER」とでも名乗りましょうか」

何なんだ、この人。

だが、その疑問を考えるより先に、俺は耳を疑うことになる。

「皆様には、これから”JOKER”となることを賭けて、殺し合
いをして戴きます」

．．．は？

一文字の気持ちを口に出す前に、頭上から黒光りする十二の何かが。

「ゴキブリっ!？」

誠也は飛び退く。

．．．いや、黒光り!!ゴキブリって．．．。

俺は、よく見ようとして近付いた。

．．．拳銃だった。

「私が本気だと、ご理解戴けましたか？」

スピーカーの声。

「まさか、こんなの．．．偽物だろ？」
”スペードの四”を持つ男が、適当に銃を拾い、これまた適当に引き金を引いた。

ぱん。

乾いた音と共に、たまたま銃口の向いていた”スペードの六”の女が倒れた。
その頭から、血を吹き出して。

．．．静寂。

「うわあああ！．．．！．．．！本物だああ！．．．！．．．！．．．！．．．！．．．！．．．！
引き金を引いた男が叫ぶ。

「当たり前じゃないですか。」 JOKER”を決める儀式なんですから。全て殺し終えたら、最後の一人は体育館のステージまで登って来て下さいね。表彰式がありますから」
それを最後に、スピーカーはスイッチを切られたようだ。

「・・・てめえ、ふざけんな！！ 俺の女、殺しやがって・・・！！」

わなわなと怒りに震えるのは、”スペードの五”の男。

”五”は”四”に銃口を向けた。

「え、ちょ、待ってくれよ。俺達、親友だろ？」

”四”は命乞いをする。

「もう関係ねえよ、そんなこと。さっさと死ねばん、と言う銃声と共に、”四”は倒れた。」

”四”の持つ写真が、手の平から滑る。

そこには”五”の男の顔写真が。

．．．成る程ね。

次の数字の人間の、しかも知り合いの顔写真って訳だ。

だから”十三”である誠也には”一”の俺の写真。

”一”である俺には”二”の桃の写真が、届いた。

．．．なんて回想をしている間に、俺達の目の前は惨劇と化した。

返り血が、俺達の方にも飛んでくる。

深紅の雨か。

いや、これはその状況を遥かに上回っていると思う。

そうだな．．．例えるのなら”鮮血の霧”だ。

初めに十三人もいたはずなのに、いつの間にか、残り五人となっていた。

「危ないっ！！！」

誠也は俺を庇うように飛び出す。

．．．鉛玉は、流れ弾は、
俺の友人を絶命させた。

残り四人。

俺達以外の二人は同時に撃ち合い、互いに”肉片”と呼ばれるべき
かどうか分からない”何か”となった。

残されたのは、俺達二人。

たった二人だけ。

．．．どうしよう。

俺、一体俺は、どうすれば良い？

「由縁君．．．」

不意に、桃が言った。

「私を、殺して」

俺は、脳の”フリーズ”と言う現象を理解した、気がする。

「・・・え？」

「”JOKER”は、たった一人。本当は、私が”JOKER”になるはずだった。けど、私・・・由縁君を殺せないよ・・・」
泣きじゃくる桃。

「そんな・・・そんな！ 馬鹿馬鹿しいこと考えるな！！」

空元気が、空回りする。

それでも俺は、言わなきゃいけない。

「二人で、何処かへ逃げようぜ。警察に通報して、あのスピーカー

男を捕まえて貰おう」

「駄目だよ．．．例えば私達が助かっても、”意味がない”の
桃は意味深なことを言う。」

「だから、私達のどちらかが”JOKER”にならなきゃ。そのた
めには、どちらかが死ななきゃいけないの」

分からない。

分からないよ、桃。

混乱する俺に、桃は言った。

「大丈夫、私、自分で死ねるから」

そう言って、桃は自分のこめかみに銃を突き付ける。

微笑んでいた。

優しい笑顔だった。

「私．．．由縁君が友達で良かったよ」

何故だろう、俺はフリーズしていたくせに。
その言葉にだけは、答えなきやいけない気がした。

「ありがとう。．．俺もだ」

そう言うと、彼女は嬉しそうに少しはにかんだ。

「桃．．」

「ばいばい、ありがとう」

彼女は引き金に人差し指を掛ける。

「．．桃、やっぱり死ぬな!!」

俺は彼女を抱き締めて、銃口を彼女から反らした。

ぱん。

また、この音だ。

非日常なくせに、今日一日で聞き過ぎた音。

飽きる位に。

そして、銃弾は俺の胸を貫いた。

いとも簡単に、貫いた。

ははは、何だ。

簡単なことじゃないか。

彼女を殺したくなければ、

彼女を生かしてあげたければ、

．．．始めから、こうするべきだったんじゃないか。

俺は嫌に満足した。
自分が最期に、導き出した解答こたえに。

「ゆ．．．由縁君．．．っ!」

桃の声。
彼女が泣いている顔、霞んでいく。

「由縁君、ごめんね．．．っ」

何故か彼女が、謝ってる気がした。

桃は指定されていた、自分の在籍する高校の体育館のステージ上にいた。

そう、今回の”JOKER”として。

「おめでとうございます、流石は”鹿江桃”様ですね」
先程のスピーカーと全く同じ声で、トランプの”JOKER”の格好をした彼が笑っていた。

まるで道化のように。

「全く、何が”おめでとう”よ。由縁君を殺させておいて・・・」

「でも、私は貴女が来ると信じておりました」
”元・JOKER”は冷たく笑う。

「貴女の恋人は、私が殺したんですから。復讐は果たさなくては」

「でも・・・由縁君を失ってまで、する復讐じゃなかった」
桃は袖で、涙を拭い取る。

そして、事の顛末を語り始めた。

「半年前、貴方は高瀬君と一緒に、この”JOKER”の選抜会に選ばれた」

「おや、もう半年も経つのですか」
彼は笑う。冷たく笑う。

「あの時のカードは”ダイヤ”でしたね。だから一番金持ちだった彼は狙われ、真っ先に殺された」

過去を振り返る遠い目で、彼は言った。

「貴方が、高瀬君を殺したの？」

「いいえ、直接は手を下してはいません。強いて言うのなら”見殺しにした”ですよ」

「同じじゃない!!」

桃は彼を思いつ切り殴った。

「はは．．．人間、傍観者が一番得をするんですよ。あの時もそうでした。彼を殺した人間達が、金品を奪う。そして他の奴らに殺される。その繰り返し．．．そして最後の一人だけ、僕が始末する。何がおかしいんです？ 現に貴女も、今回、全く同じだったでしょう」

「あんななんかと．．．一緒にしないで！！」桃は泣き叫んだ。「由縁君を、返してよっ！！」

「強いて言うなら、皆この”しきたり”に殺された。皆が皆、憐れなる”JOKER”ってことね」

「．．．何、上手いこと言った”って顔してるのよー！！」

「桃さん．．．私の顔、見えるんですか？」

「下の名前で、呼ばないでよっ！！」

呼んで良いのは、高瀬君と由縁君だけ。

なのに……。

「まあ、話はそれ位にしましょうよ」「彼は桃を、下の名前で呼んだことをごまかす。」

「貴女は”JOKER”となる代わりに、”元・JOKER”を殺し、更に願いが一つ叶うんですから」

「そうね……じゃあ、このゲームを終わらせてくれる？」
だが、その願いは聞き入れられなかった。

「”これ以上、悲劇を生みたくない”って偽善ですか。でも駄目なんです。止まりません。”JOKER”が次の”JOKER”に殺されるのを恐れていると見なされるので」

「死ぬのなんて、怖くないわ。由縁君が、目の前で死ぬことに比べたら……」

「・・・そうですか。では、代わりに私めの正体を」

彼は冷たく笑う、” J O K E R ” の仮面を外す。

その顔は、高瀬君の親友の顔。

いや、親友だった、顔。

「・・・やっぱり、貴方だったの。葬式でも涙一つ見せないなんて」

その問いには答えず、

「はい、これはもう、貴女の物ですよ」

彼は” J O K E R ” の仮面を桃へと被せた。

「最初は、婆抜きで” J O K E R ” を引いた人が、他の人達を殺した所から始まったらしいですよ。私怨って怖いですね」
仮面を外した後も、彼は薄気味悪い笑みを浮かべる。

「そして後悔と戒めのために、彼は儀式を行った。十三人に、」

OKER”のトランプを配ってね

”JOKER”の時は、騙し合い。

そして勝者が、彼を殺した。

「勝者は”最も愛する人間なら、心優しいから次でしきたりが終わる”と考えていたそうです」

そして十三枚の、ハートと”JOKER”が裏表のカードが配られた。

そしたら、残ったカッパルの二人は狂ってた。

．．．正確には、選抜の”殺し合い”の果てに狂った。

「最後はちょうど、貴女達のようにでした。違うのは、彼女の方が本当に自殺したことで」

残された彼氏は”最も幸せな人間なら、幸せだから次でしきたりが

終わる”と思った。

そして十三枚の、クラブと”JOKER”が裏表のカード。
”幸福”を象徴する、クラブのカードだった。

ところが、何故か一人の男と十二人の女。
しかも最悪なことに、男は性欲が強かった。

性欲を満たすことが、その男の中で唯一の、幸せだと思っていた。

「十二人、全ての女子生徒を無理矢理犯して、全員自殺に追いやった。あいつこそが本物の”JOKER”じゃ・・・」
言いかけて、止めた。

桃が恐ろしく睨んでる。

冷たく笑う、”JOKER”の仮面の中から。

「・・・そして、その男は”金で何でも解決しよう」と、ダイヤのカードを十三枚作った。それが私達の代でございます」

とち狂った男でも、一応”解決しよう”とは思ったのか。
”金”と言う、安直な結論だが。

「ちなみに・・・何で今回、スペードを選んだの？」
桃は仮面越しに聞いた。

冷たく笑う、仮面越しに。

「四つの中で、残ってたから。理由は色々あっても、結局は殺し合いですし。それなら、スペードは元々”死”のカードですから。シンプルでしょう？・・・それに、もう”このしきたりを止める”なんて不可能ですよ」
彼は一気にまくし立てた。

「では、預金通帳がそこにありますから。”JOKER”の経費はそこからお願います。私のように拳銃を調達したりして、無駄遣いしないで下さいね？」

「・・・あなたに言われたくないわよ」

「確かに」彼は苦笑い。
「では、次の”JOKER”としての仕事、全うして下さいね」

「当たり前よ」仮面の彼女は、言った。

「では、私の仕事はお終いですね」

「楽には、死なせないから。これが私の、せめてもの復讐」

ぱん、と肺を撃ち抜かれる音。

彼はきつと、三十分程死ねずに苦しむだろう。

終始笑いつぱなしの仮面の彼女は、そんな彼に背を向けた。

「やっ、と」

思案した挙げ句、何も思い付かなかったので。

「最初に戻ったわね．．．」苦笑する桃。

その手には、十三枚の”JOKER”のカードが。

しばし、郵便ポストの前に佇む。

これで、次の”JOKER”が決まる。

そしたら、私は殺される。

「高瀬君、由縁君．．．待っててね。もう少しで、会えるから」
桃は可愛らしい、笑みを浮かべた。

そして、十三通の封筒を郵便ポストへ。

「うふふふふ」

彼女は笑う。冷たく笑う。

まるで、道化のように。

平凡な日常に、ばらまかれた不穏のカード。

十三人のジョーカーが、冷たく笑う・・・。

(後書き)

次の”JOKER”は、貴方の番ですよ？

作者（江角 稚）は笑う。冷たく笑う。

まるで道化のようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0945ba/>

JOKERは冷たく笑う

2012年1月2日02時50分発行